



ミーフガー（久米島）

見られ感激した。

「ヤジャーガマ」と呼ばれる鍾乳洞へ向かった。洞穴生の種類は期待できないにしろ、ひょっとしたら面白いものが、見られるのではないかという一種の期待があった。洞穴内には「立ち入り禁止」の立て札が立てられ、入れなかつたが、雨はひどくなり、採集は困難になったが、落ち葉をすかしてみるとコシビロダンゴムシがぞろぞろ出てきたので、雨の中をがんばる。

雨はますますひどくなるので久米島自然文化センターへ行った。はじめは名前からして民俗作品や芸術作品を扱っているところと思って行ってみると久米島の生い立ちや島の生物の特徴がジオラマ、立派な標本、映像で展示されていた。「久米島博物館」という名前だと真っ先に行くのにナアと思った。もっとも「科学文化センター」という名前も同じように観光客には分かりにくいのではないかと反省させられた。

ますます雨はひどくなってきた。採集をもう少しと思ったが、着実に博物館見学をしようと思い、久米島ホタル館に向かった。ホタルだけでなく、久米島の小動物や植物が飼育、栽培されていた。一生懸命世話をしている女性がいた。

雨は強かったが、もう一息、標高の比較的高い場所のサンプルをみたいと思い、地図を見ると、だるま山園地というのがあり、ここまで車を走らせた。標高があるところなので奄美のようなヒメフナムシを期待できるかもしれないと思った。しかし、雨はますますひどく、風も強くなって横殴

りになる。

車から出るのも困難になってきた。「帰りの飛行機が果たして飛ぶのか」が心配になり、最終は早前に店じまいし、遅めの昼食を済まし、飛行場に戻る。何とか飛ぶらしい。良かった。

沖縄島－大学の構内－

夕方、沖縄島那覇空港に着く。ここからはできたばかりのモノレールに乗る。がんばって先頭の席を取り、すっかり都市の風格の那覇の街の風景を楽しみ、沖縄県立博物館を訪れる。儀保駅から歩くが、道を間違えてしまった。学芸員を待たせてしまい、まだ暑さの残る学芸課事務所で彼と会えたのは30分以上後であった。

翌日は琉球大学の日本甲殻類学会の研究発表会に出席するも、やはり休み時間にはワラジムシが気になる。構内は大変豊かな自然がある広大な敷地にある。状況は久米島と同じであった。島嶼はどうしても林の中よりも、路傍の石や板の裏側にワラジムシ類はいた。在来と外国産の両方が見られた。

懇親会はさすが地方色の豊かなものであった。大会長の琉球大学諸喜田教授も張り切っておられた。私は数々の料理の中でも今まで食べたことないアサヒガニをぜひ食べてみたいと思った。カニとヤドカリの中間的な仲間がどんな味をしているのか試してみたくなった。予想通りというべきか、カニに違いないが、イセエビの仲間と似たような、異尾類であるタラバガニにほんの少し似ているような気がした。気のせいかも知れない。

学会の発表の中身でも、また懇親会やコーヒーブレイクでも琉球列島の生物相の特殊性や面白さを聞くたび、妙に同調し、今度はどこに行こうかなと考えるのだった。

名誉会員 本多啓七先生を悼む

長井 真隆

A Memory of Late Honorary Member, Mr. Keishichi Honda

Shinryu Nagai

本会名誉会員本多啓七先生が、平成15年10月28日ご逝去されました。享年91歳でありました。本会の設立をはじめ、会の発展に多大なご尽力をされたのであります。ある一時期は事務局もお引受けになり、昭和63年からは3年間会長に就任されました。こうした先生のご功績に深甚の謝意を表しますとともに、ご生前のご活躍を偲び心からお悔やみを申し上げます。

先生は明治45年元旦、富山県下新川郡三日市町（現黒部市）にお生まれになり、昭和6年3月富山師範学校をご卒業され、松倉尋常高等小学校（現魚津市）に奉職。後に文部省中等学校教員検定試験に合格し、昭和16年富山県立魚津高等女学校、引きつき学制改革後は富山県立魚津高等学校に奉職されました。その後富山県教育委員会指導主事、富山県理科教育センター所長代理、昭和40年上市町立上市中学校長に就任され昭和45年3月にご退職されました。その間富山県理科教育研究会会長、日本理科教育学会理事として理科教育振興に手腕を發揮される一方、ご専門の植物学をとおして、富山県自然環境保全審議会専門委員、同文化財保護審議会委員、富山県自然保護協会事務局長等の要職に情熱を傾けられたのであります。

先生は天与の明晰な頭脳の持ち主であり、一方では努力家でもありました。実弟の本多栄吉さんが、以前、次のような話をされたことを思い出します。「兄貴のことを褒めてなんですが、大変な努力家だった。旧制中学時代、おれたちが遊んでいても、兄貴は勉強に夢中だった。粉雪が吹き込む窓際で、みかん箱で組み立てた机に向かって勉強していた。私は子どもだったが、その姿が今でも強く印象に残っている。……」と。先生の教育界における活躍ぶりや、植物研究へのたゆまぬ情熱の原点は、まさにそこにあったのかと思った

ものです。そしてその情熱は、歳を重ねても衰えることがなく、晩年は2本の杖で身体を支えながら役所を訪ね、あるいは立山や黒部峡谷までにも脚を運ばれたのです。故郷の自然を自分の目で確かめ心で温めて納得し、あるいは手を打つという、先生の強い意志を貫かれたのであります。



「和」を指針としたありし日の本多啓七先生
(神奈川県にて、平成7年)

こうした先生には『富山県東北部植物誌』のほか、立山・称名滝総合学術調査團に参加された『称名渓谷の植物相』、『日本アルプスにおけるガキ田の生態』、『北アルプスの構造土とその成果』、『黒部峡谷のkar地形と植生』、『立山周辺に分布する泥炭地植生の特質』などの多数の論文があります。先生の論文や報文の中には、昭和初期からの、いわば高度成長期以前のものが数多くあります。それには自然破壊や自然改変以前の自然相が克明に記録されており、当時の自然を知る上で貴重な情報源となっています。例えば有峰生物相学術調査團に参加された『有峰地方の植物相』(1961)は、湖底に沈む前の有峰の植生のほか、植物方言などの植物民俗にも及んでおります。1例を挙げますと、ハンナガゴヨウとかカネクイモミという植物方言が記録されています。ハンナガゴヨウはチヨ

ウセンゴヨウのことで、毬果がゴヨウマツより半分以上長いことからつけられたようです。カネクイモミはコメツガのことで、幹が堅くて打ち込んだ斧の歯が早くこぼれ落ちるからです。遠く離れた有峰の地で、樹木とかかわってきた生活を垣間見ることができます。有峰のかつての植物に関する唯一の文献であります。また、天然記念物調査、立山の緑化復元などの社会的な貢献度も高く、その中に緑化の折りの逸話があります。昭和50年代、室堂園地の玉殿の湧水の岩間に、ミヤマビャクシンの成木を移植し、「おれが死んでも生き続けてくれよ」と、愛でられたのです。誰もが活着は無理だと半信半疑でしたが、それがうまくつきました。私の緑化復元試験地が、その隣にあるので毎年現地に行くたびに見守っています。豪雨で株が露出したこともあります、元来岩場の植物だけに緑を失うことなく旺盛に育っています。先生のたくましい生涯を見る思いがします。

もう一つ、若いころの毛勝山登山があります。先生とベテランの尾山一則先生、笠井武夫氏と私の4人で、昭和31年8月24日から2泊3日で登りました。魚津大火の半月前のことです。先生は45歳、先生にとっても毛勝山は初めてだという憧



毛勝山登山。板菱手前の峡谷で夕食の準備をする。左から本多先生、長井、尾山先生 (1956.8.24)

れの山であります。初日は阿部木谷の板菱手前でテントを設営し、2日目は早朝から毛勝大雪渓を登りつめ2,414mの頂上を目指しました。勾配が急な上にガスで視界が閉ざされ前方が見えぬ、まさに五里霧中の登山でした。午後1時過ぎガ

スが薄れ、目前に直立した荒々しい毛勝谷と、その上部に毛勝山の稜線が見え隠れしました。皆が歓声をあげ元気を取り戻して頂上を目指します。頂上で寄せ書きしたノートには午後2時15分とあります。尾山先生のメモは「全くえらい登山、登路がわからぬのにへいこうす」とあり、本多先生は「山男やっとのぼった頂上かな」とあります。県教委優良教員表彰記念の年賀状には、阿部木谷の激流を横切る先生の写真が添えてありました。先生にとっては、生涯忘れぬ登山だったのです。

先生の幾多のご功績に対して社会的・国家的評価が高く、多くの受賞歴があります。主なものに富山新聞文化賞、県政功労表彰、秩父宮学術賞、全国環境功労表彰、内閣総理大臣表彰、勲五等双光旭日章などがあります。

先生のご葬儀は、ご家族や関係者が参列するなか、しめやかに行われました。魚津高校で教えを受けた昭和26年ご卒業の、園芸植物研究家古川仁朗さんは、寒牡丹を手にしてお別れのことばを述べられました。「先生、今年、初めて寒牡丹の花が咲きました。白い花と赤い花があります。かつて先生は白い花は劣性遺伝だが、皆等しく美しい花だ。人も同じことだ。人には劣性ということはない。といって私たちを教育してくださいました。この花をまず棺前にお供えします。」と。参列者は、この冒頭のことばに先生の若いころの素晴らしい教育理念に、また教師と生徒の深いきづなに胸を打たれたのであります。そして野山の生きとし生けるものを、分け隔てなく愛された先生のお姿を重ね合わせて、ありし日の先生を偲んだのであります。劣性なき、悔いなき先生の生涯に想いをあらにしたのです。

毛勝山登山の折り、へとへとだったものが、毛勝の稜線が見えたとき嬉しくなりました。長くつらい登山で先が見えてきたことの喜びです。先生の晩年はつらい入院生活でしたが、いわば人生の先が見えてきた究極のひとときのように思います。想いを寄せて改めてお悔やみを申し上げます。

靈峰立山のミヤマビャクシンは、風雪に絶えて力強く見事に育っています。先生の願いを後々に伝えて行くことあります。

本多啓七先生の逝去を悼む

本瀬 晴雄

〒939-0617 富山県下新川郡入善町春日455

A Memory of Late Mr. Keishichi Honda

Haruo Motose

平成15年10月28日、本多啓七先生が永眠されました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。先生から頂いたご指導と人生の教訓は数多く、何かに着けてふつぶつと思いつだされて来ます。先生には非常に多くの業績があり、それを挙げて称えることも追悼の方法ですが、私は、在りし日の先生と共に行動したときのことを語ることで、追悼の意を表したいと思います。

「平成7年8月11日、記録的大局豪雨が黒部峡谷を襲い、峡谷内部に崖崩れ、土砂流出、出し平ダムの流木の堆積等の惨状をもたらした。さらに、出し平と釣鐘の間で、土砂崩れによって峡谷鉄道の軌道が切断され、猫又の作業員合宿所、鐘釣温泉等で合わせて69人が孤立状態となり、航空自衛隊小松基地の大型ヘリと県警のヘリによる大救出活動が展開された。

また、愛本より下流の扇状地部には、新河動計画による構築物の一部流失、大量の流木の流出と堆積、国内唯一のアジサシの営巣地であった黒部川河口の砂州の流失、沖合300mほどまでの土砂の堆積等の被害がもたらされた。」

これは、当時私が撮影したビデオにつけた解説の一部である。この大出水は、昭和44年8月以来の記録的大出水であることはよく知られている。これまでにも、黒部峡谷に多くの業績を持っておられる本多啓七先生は、この災害に大変心を痛められ、何とかして猫又まで行きたい、今回の大量的の土砂流出をもたらした猫又谷の崩壊状況を見たい、この崩壊の直撃を受けて土砂で埋まり、機能を停止してしまったという猫又発電所の状況を見たいなどと、沢山の想いが先生の脳裏に去來していたようである。

8月も終わろうとする頃、本多先生が「本瀬さん、建設省へ行って頼んでみようかノー」とボソリと言われ、私もお供をして建設省黒部工事事務所(現国土交通省北陸地方整備局黒部工事事務所)へ赴いた。

何課へ行ったかは別として、課長さんは「先生のお気持ちはよく分かりますが、何しろ災害復旧工事が進められている最中で、危険が多いので」と丁重なお断りを受けてしまった。

「それなら、関西電力に頼んでみるけ」と本多先生が言われ、その足で宇奈月にある関西電力黒部川電力所へ赴いた。そこで、「電車は笛平まで、それから徒步で5kmほどあります。途中には、電車の軌道が崖崩れで切られているところを渡つたりするので危険だから、関西電力の職員を一人つけましょう」と許可を得た。期日は9月6日、電車は午前7時18分朝一番の工事列車ということである。

いよいよ当日の朝7時過ぎに本多先生、若林一成氏と私の3名が峡谷鉄道へ行くと、既に関西電力の職員の方が、私たち3名のヘルメットを持って待っておられた。挨拶をしてヘルメットを受け取り、電車に乗り込む。本多先生は、いつもの山行きの服装に左右2本の杖。この頃既に足の具合が相当に悪く、足を引きずるようにして歩いておられた。この視察行に対する本多先生の意志は非常に強く、黒部川電力所へ向かう車の中で「現場を見ないで語ることはできん」と呟くように言われた言葉が、いつまでも私の耳に残っている。

電車は、柳川原の河川敷に流木を止める柵が作られ、そこで止められ流木が山のように積み上げられているのを右に見ながら、8時少し前、現在